

昭和三十三年調査研究概況

Ⅰ 綜合 研究

叙尊の研究は昭和卅年度西大寺に於ける基礎的調査と同寺什宝叙尊像の胎内文書の整理から口火を切り、その時の資料は「西大寺叙尊伝記集成」として世に問うた。これは勿論叙尊関係文書記録のすべてではなく、今後の調査の足がかりと云うべきものであった。

1 西大寺叙尊の研究

これらの基礎調査から叙尊の思想的立場、例えば釈迦信仰、舍利信仰、文殊信仰等のあり方が判明したほか、その活躍の舞台も明らかになり、山城、大和、河内、和泉、摂津、紀伊及び関東に及ぶ数十ヶ所の留錫地が把握されるにいたつた。これらの地には偉大な先人の足跡が残されていることは明らかなので、昭和卅一年以降引き続きその調査が実施された。その主な箇処は奈良県下で法華寺、海竜王寺、般若寺、大藏寺等、大阪府下では道明寺、西琳寺、教興寺、京都府下で橋寺放生院、浄住寺等があげられる。

これらの調査によつて集められた多くの研究資料はその都度整理されて、すでにきわめて大部のものとなつてはいるが、その一部は「仏師善田・善慶・善春」(小林、仏教芸術)「道明寺聖徳太子像」(小林・杉山、研究所学報、八冊)「西大寺の舍利塔」(守田、大和文華二〇号)等に報告された。しかしそれらは

あくまで綜合的研究の一部にすぎないので、多くの諸寺から集められた諸資料に基いての研究はすべて今後委ねらるべきである。従つて三十四年度以降さらに鎌倉仏教の系譜をもたどりながら、叙尊の文化史的 position を究明し、その遺された作品についての価値の闡明に努力を傾けることにしている。(彫刻・絵画・工芸室)

2 元興寺極楽坊発見物の調査研究

(文部省科学研究費交付金による研究)

昭和卅三年度下半年期、同寺の庶民信仰資料の整理と研究をその主目標として科学研究費の交付を受け、田沢所長を研究主班とし、奈良国立文化財研究所の歴史室を含めた美術工芸班が主体となり、これに奈良国立博物館、その他諸大学の仏教学、社会学、国史学、国文学等の諸先生を糾合し、その調査研究に當つた。

下半年期の短い期間だつたので、主として研究の前提となる分類、整理及び保管の方法に限定され、これが庶民信仰の資料として速やかに活用しようとする記録を作る方向に努力が注がれた。

分類の方法は形式別を実施され、絵画関係として板絵、印仏、彩色印仏、その他。彫刻関係は千体地藏、板千体地藏、その他納入文書及び仏像断片。工芸関係として柄杓、花瓶、献供板、折敷、その他。文書関係として墨書板、こけら経、経巻類、文字瓦

類等。仏教民俗資料関係として小型五輪塔、同板五輪塔、笠塔婆、角塔婆、納骨塔等がその大要である。これらはそれぞれにアルファベットの大分類番号を附し、そのもとで同形式のものに通し番号を連ねる方法で整理を行うことに決定した。上のうち、こけら経(石田茂作博士担当)と仏教民俗資料(五来重教授担当)を除いては、すべて研究所の各研究室で担当した。

整理格納に當つては、板絵の如き大型のものには大型の箱を作つたほか、すべて一尺×一、二五尺の箱に納置し、又千体地藏の如きはプラスチック板に糸で一体ずつ固定させて散逸を防ぐことに努力した。以上の作業は卅三年度分のごく大要である。

尚これらと併行して同寺什宝の聖徳太子、弘法大師画像及び同胎内納入物の調査と研究も進められ、先の庶民信仰資料の一部と共にすでに報告に附せられたものもある。(彫刻・絵画・工芸・古文書室)

3 鳥羽殿遺跡の実測調査

昭和三十三年七月、名神高速度道路の計画が発表され、その路線は明治初年建設の国鉄東海道線に沿つて奈良電鉄竹田駅北方二百米附近を過ぎ、新大阪国道の加茂大橋のすぐ南側の地点に至り、そこから真西に加茂川原を越えて山崎方面に向い、その間城南宮の背面に當つてインターチェンジが設けられることなどが明かにされた。この一帯は十二世紀前半頃白河、鳥羽両上皇が造営された鳥羽殿の宮殿、御堂及園池の遺跡であり、該道路が完成すれば、その重要な部分が破壊されることは必定である。文化財保護委員会、京都府教育委員会は相談の結果、道路

公団の同意を得、この予定路線一帯の詳細な実測調査を行うこととなり、奈良国立文化財研究所建造物研究室が主体となつて、その調査に當つた。

鳥羽殿が存在したと推定されるのは京都市伏見区竹田町、中島町、下鳥羽一帯の土地であり、調査の区域は北東限は奈良電鉄加茂川鉄橋、南限は同電鉄高瀬川鉄橋、西南限は京川橋附近の加茂川原に至るまでの東西約一、五軒、南北約二軒、面積にして二、五平方軒にわたる広大な面積であつた。調査に當つては香川大学助教授浅野二郎、京大農学部大学院村岡正氏外八名で、三班を編成し、トランシット、レベル、測距アリダート使用平板測量を併用し、八月二日から九月二十六日迄の晴天四十五日間、測点一万点以上に及び、縮尺五百分の一、五〇厘毎の等高線の実測図に海拔標高を記入した。

この調査で旧北大路跡らしい地形を見出したこと、南殿の位置は中島町堀端及北之口附近、北殿は竹田田中殿から小屋之内の国道沿いの樹叢附近、東殿は安楽寿院を含む竹田内畑町一帯、又御所之内にある海拔一九米〇四の丘状地形は築山跡であろう事などが判明するにいたつた。その詳細は、名神高速道路々線地域内埋蔵文化財調査報告（昭和三十四年六月京都府教育委員会刊）を参照されたい。（建築・遺跡庭園室）

4 川原寺の発掘調査

5 仁和寺所蔵古文書聖経等の調査

（この両者についてはやや詳細な報告を本文中に記した）

II 美術工芸研究室

1 藤原時代彫刻の研究

前年度に引続いて本年度も各地にわたつて調査を行い、奈良県にある、金勝寺の薬師如来、靈山寺の薬師三尊像（治暦二年銘）や、融念寺の聖観音立像（延久六年銘）、京都府では、岩船寺の阿弥陀如来坐像（天慶九年銘）、大阪府では、興善寺の大日如来（保安元年銘）、薬師如来、釈迦如来坐像（寛治七年銘）を、とくに本年度には納入文書その他で造立年代が確められる像を主体として調査を行つた。（彫刻室）

2 能楽発達期における能狂言面の研究

これも前年度に引続き、三重県の宇留富志禰神社及び賀多神社などの能面及び狂言面を調査した。（彫刻室）

3 平安時代仏画の調査と研究

主として十二天画像の經典的根拠、画像の成立時期の問題等を究め、醍醐寺大師様画像、西大寺本、東寺大治本等の各十二天についての具体的考察を試みることにつとめた。西大寺本についてはこれをほぼ纏めて上梓の時を俟つことにし、東寺大治本については昭和三十三年度美術史学会にその大要を発表した。その要は西大寺本の成立を平安前期も貞観年中の入唐者宗叡の功に帰せらるべきこと、東寺大治本については仁和寺円堂の旧画像の転写と見て天台系画像の一と考えることに結論は達した。尚この他にもこれらに関連して東寺大治本五大尊などに触れる機会があつた。その成果は今後に期したいと考える。（絵画室）

4 南都仏教に表現された講会関係絵画の研究

（文部省科学研究費交付金による研究）

すでに旧年度より着手しつゝあつた南都系仏画の具体的な調査とその研究を実施した。今年度の主たる対象としては東大寺の仏画の調査、興福寺の南円堂壁画及び弥勒菩薩厨子屏絵、さらに薬師寺の諸仏画の調査などを行つた。これらの調査はかなり総花的であつたが、その目途とする所は南都系仏画の一般的傾向を明らかにすることであり、ひいては南都系絵画の源流である天平仏画の様相を尋ねることであつた。従つて他面文献の側からの研究も怠らなかつた。しかし法隆寺その他の諸大寺の調査を完了していない今日、まだ結論をなす段階に至っていない。（絵画室）

この他、伊勢市の美術工芸品調査、又法金剛院・安楽寿院の絵画調査を実施、後者は目録を制作した。又当麻寺本堂の解体修理に伴う発見物の調査にも数回立会つた。（絵画室）

5 舍利塔の様式的研究

前々より引続き舍利塔の様式的研究を行つてゐる。東大寺の重源様式（仮称）、唐招提寺の鑑真様式（仮称）、西大寺の叡尊様式（仮称）など様式的に特色を有する舍利塔をはじめとして、全国の各社寺に残存する舍利塔の様式と年代的連関、それらの舍利塔もつ美術工芸的価値を研究する。西大寺、唐招提寺の舍利塔は一応の調査を終つたので、本年度は唐招提寺と西大寺の末寺関係と高野山竜光院及び靈宝館にある舍利塔を調査した。（工芸室）

6 厨子の研究

厨子の研究も前々より引続き行っている。諸社寺に残存する厨子の調査研究の主眼は、厨子がつ年代差による様式上の変化と工芸技術の変遷、その特異性などの解明と、その発生にいたる美術史的研究にある。

本年度は、当麻寺曼荼羅室内安置の六角形大厨子の解体修理の機会を得て数多くの新資料に直面した。この厨子の製作年代の問題、厨子に施されてある蒔絵の年代的考察及びその技術の時代性、また、蒔絵や鍍金具に見られる文様の様式などは難解な問題であり、全くの新資料で、今後これらの資料について更に調査研究を進めたい。(工芸室)

7 能衣裳と小袖の研究

このテーマは、「日本の染織研究」の一環である。ここ数年近世初期におけるわが国の染織史に大きい位置を占める能衣裳と小袖の調査研究に当っているが、能衣裳、小袖を美術史的、染織史的に究明するとともに、芸能史、服装史の観点からも研究するため、調査の対象を広め、能衣裳、小袖はもろろん、法隆寺袈裟、正倉院裂、名物裂などをはじめとして、蒔絵類に描かれてある服装形態にいたるまでを広く調査研究している。

本年度は前々より調査した能衣裳、小袖の整理にあたるかたわら、白鶴美術館蔵の古裂帖と東大寺蔵の東大寺裂を調査した。絵巻物類においては、興福院蔵の都鄙絵巻に描かれた江戸時代元禄期の小袖の様相を考察した。(工芸室)

III 建造物研究室

1 解体修理に伴う調査研究(当麻寺曼荼羅堂)
従来建立年次について問題が多かつた当麻寺木堂(曼荼羅堂)が解体修理される機会をとらえて、奈良県教育委員会に協力して調査を行つた。結果、今回発見した外陣棟木銘により、平安時代末永暦二年(一一六一)に、永暦以前の建物の材料を使い、組替え、規模を拡張して再建されたものであることがわかり、その後、文永五、康永二、長享二、大永八、天正一一・一二、正保五、元禄元、享保八と幾度か小修理が加えられていることがわかつた。なお、永暦以前の建物は、先ず初めは、桁行七間、梁間四間、切妻造、斗拱はなく柱天に桁をのせ、合掌組の丈高い、奈良時代を降ることのない時のものであつて、次いで、それが平安時代初めに、同規模の建物の古材を加え、桁行七間、梁間四間、寄棟造、斗拱は大斗肘木、二軒、二重虹梁葺殿式の堂としてその前面に梁間一六・五尺にわたる前廂を取付けたものになつたことがわかつた。(建築室)

2 六勝寺遺跡の調査研究

京都市左京区岡崎最勝寺町の元公堂跡に京都国際文化観光公館が新しく建築されることになり、昭和三十三年一月に着手された。このあたりは平安時代末に、法勝・尊勝・最勝・円勝・成勝・延勝寺のいわゆる六勝寺が造営された所であるので、工事が進むにつれて掘り出される遺跡と遺物について調査研究を行い、尊勝寺の一部であると推定出来る建築址と溝址、また遺瓦多数を発見し、平安時代末の

建築を明かにする成果を得た。(建築室)

3 南都諸大寺伽藍配置並に境内地形実測調査
大和上代宮殿寺院跡の発掘調査の目的の一つは平城京の都市計画即ち条坊制並びに大路小路の幅員、南都諸大寺との関係を究明するという問題が含まれている。これら発掘調査を今後一層容易ならしめる目的と、最近の産業開発及び観光施設による破壊を未然に防止し、適切な環境整備、自然流水利用の防災等の諸計画を実施するに役立てようという多角的な目的から、諸大寺と、研究所との合意のもとにこれらの調査が着手されることになつた。昭和三十三年度来、東大寺より調査費の一部補助を受け、旧境内地の重要部分を実測した。実測した区域の南限は南大門を東西に結ぶ線、西限は西大門跡、中御門、転害門を結ぶ線(京極大路)北は現在の正倉院北限から知足院山北麓、東はまんなおし地蔵尊から手向山八幡東背面土塁跡に至る一帯である。

猶旧東大寺に關係のある天地院や伴寺なども引きつづき実測調査をつづける予定である。(遺跡庭園室)

4 旧秀隣寺と北畠国司館跡庭園実測調査

中世庭園文化史(大乘院庭園の研究)では、興福寺大乘院庭園を中心として、比較のため室町時代に於ける蓮如上人関係庭園と朝倉館跡庭園などを紹介した。其後興福寺関係文書から文明四年伊勢国司北畠政具の弟某、文明十五年には政具の息孝縁が、更に晴具の息具親が東門院に入室するなど、密接な関係のあることが判明したので、これらが興福寺文化圏内にあるかどうかをただすために、七月上旬に伊

勢国多気にある北畠国司館跡を調査した。一方享祿元年に京都の兵乱を避けて、近江国高島郡の朽木植網を頼つて寄寓した足利将軍義晴が、細川高国を伴つて此地に滞留している事実も明白となつたので、

旧秀隣寺の庭園をも殆んど同時に実測調査した。旧秀隣寺の庭園は、将軍義晴が、滞留の徒然のままに、庭園を自作したという伝承が西北紀行と近江輿地志略巻九十四高島郡三に書かれている。それは兎も角両者の地形や、汀線の取扱方などはよく似ており、又北畠国師館跡庭園に於ける築山裾にある枯山水の石組や、旧秀隣寺鼓滝の石組の意匠などは、室町時代中期の作例として疑問の余地がなく高く評価されてよいものである。(遺跡庭園室)

5 近世初期建築及び庭園に於ける小堀遠州及びその流派による業績と、その作風に関する研究

(文部省科学研究費交付金による研究)
本研究は、京都御所離宮の研究の一部、近世初期御所離宮作者の問題を取扱つたものである。

近世初期建築及庭園界の巨匠として知られる小堀遠州の業績のうち、私達最近の研究の結果、桂離宮については、その伝承の通りを受けとることが出来ないことを証明した。そこで今回は小堀遠州の本当の作品と、伝遠州作の中で、遠州の弟小堀正春、息権左衛門の作品、遠州の近親中沼左京及松花堂の作品、遠州の弟子村瀬左介、賢庭、剣左衛門、玉淵坊等の業績を分類することを試みた。又遠州の作品の中でも遠州が設計し、しばしば現場を訪ねて、指揮監督をしたものと、設計だけして、現場を弟子の職

人達に委せ切つたものがあるのではないかとの見当をつけて、左記のような文献・現場・両面の調査を行った。

- 即ち、1、桂離宮建築庭園、2、仙洞御所庭園、3、京都御所建築庭園(以上昭和二十三年以降三十二年迄調査一応完了)
4、大徳寺塔頭孤篷庵、石橋、敷石道、忘筌露地等、5、近江孤篷庵庭園、6、南禅寺木坊南庭、7、南禅寺塔頭金地院庭園並東照宮附近一帯、8、高野山天徳院庭園(伝遠州作)の実測調査及び、9、宮内庁書陵部、10、内閣文庫、11、史料編纂所蔵遠州関係資料の調査などを実施した。

これらのあらゆる場合について、その内容を厳密に検討して見ると、遠州が設計だけでなく施工をも指導したものは格調が高く、職人委せにしたものは、やはり品位に乏しいことに気がついた。又皇室や幕府からの公式依頼の場合は、故実にしづられ、周辺の干渉を気にしながら政策的な立場で参訓し、どことなくいぢけている。誰へも気がねせず自由な立場で振舞えた邸宅や隠居所の場合は、遠州独特の意匠がはつきり出ていて面白い。この点については将来もつとはつきりした結論を得ることができらるであらう。(遺跡庭園室)

IV 歴史研究室

1 古文書調査概要

前年度より引続いて興福寺所蔵文書典籍の調査を行つた。特に紙背文書の中に二三目ぼしいものが発見されたが、その中「御遂講難類風記」紙背文書に

は注目すべきものがある。即ち建武三年十月四日足利尊氏御教書案は半済の起源を思わしめる内容を有している。又その他の文書も何れも建武年間頃のものと考えられるが、この中には当時の社会情勢を知る上での好史料が少からず含まれている。

興福寺以外では仁和寺を始め個人所蔵の文書等の調査を行つたが、仁和寺調査についての詳細は別に譲る。個人所蔵の文書についてはここでの詳論を憚るが、この中には新発見の平安時代の文書を始めてかなりの成果を上げることが出来た。(古文書室)

2 古瓦の編年的研究

前年度に引続き飛鳥地方の発掘調査における出土品の整理及び復原を行つた。とくに川原寺の発掘と共に瓦の研究を併行して行い、川原寺創建時の瓦、平安時代、鎌倉時代の遺品の量的関係を究明することに努めた。これらは来るべき川原寺発掘報告書に報告するつもりである。また興福寺食堂の出土瓦も報告書作製のために従来の調査資料を整理し完成した。さらに瓦その他遺物一般の記録及び整理の方法を研究し、遺物台帳をハンドソート・パンチカード法に統一することに決定した。(考古室)

3 弥生式時代墓制の研究

前年度に引続き下関市安岡町梶栗浜遺跡の調査を行い、箱式棺二基、合蓋土器一基の発掘を行つて、前年発見した墓域の施設の詳細を究明した。(考古室)

昭和三十三年度調査研究概況

V 研究 発表 表

A 講 演

- 1 昭和三十三年五月二十四日（於本所）
飛鳥寺塔址の発掘調査 坪井清足
川原寺の第一次発掘調査 鈴木嘉吉
中世庭園文化と大乘院並びに一乘院 森 蘊
- 2、昭和三十三年十二月二十日（於現地）
川原寺の第三次発掘調査報告会
- 3、昭和三十四年三月十四日
（於毎日新聞社京都支局）
奈良県川原寺の発掘調査 坪井清足
興福院の「ぶくさ」について 守田公夫
京都国際文化公館建設予定地（尊勝寺址）の調査 杉山信三

B 展 観

- 1 昭和三十三年五月二十三、二十四日（於本所）
飛鳥寺塔址及川原寺発掘出土品
- 2 昭和三十三年十二月二十日（於現地）
第三次川原寺発掘調査出土遺物

VI 昭和三十三年度文部省科学研究費交付金による研究

研究 課題	交付金の種別	研究 代表 者	交 付 金 額
南部仏教に見られる講絵関係の 絵画の研究	各個 研究	浜 田 隆	三〇、〇〇〇円
近世初期建築及庭園に於ける小 堀遠州及びその流派の業績と作 風に関する研究	同	森 蘊	八〇、〇〇〇円
古文獻資料の調査研究並びに写 真による資料の蒐集	機 関 研 究	田 澤 坦	一、〇五〇、〇〇〇円
元興寺極楽坊発見の資料の研究 及整理	総 合 研 究	田 澤 坦	五〇〇、〇〇〇円

研究 成果 刊 行 物

年 度	名 称	著 者 名
昭和二十九年 度	奈良国立文化財研究所学報第一冊（佛師蓮慶の研究） 第二冊（修学院離宮の復原的研究） 同 奈良国立文化財研究所史料第一冊 （南無阿弥陀仏作善集の複製）	小林 剛 森 蘊
昭和三十年 度	奈良国立文化財研究所学報第三冊（文化史論叢） 奈良国立文化財研究所史料第二冊（西大寺寂尊伝記集成） 奈良国立文化財研究所学報第四冊 （奈良時代僧坊の研究—— 元興寺極楽坊の復原を中心として）	小林剛、森、蘊、杉山信三 田中一郎、田中 稔
昭和三十一年 度	奈良国立文化財研究所学報第五冊（飛鳥寺発掘調査報告） 奈良国立文化財研究所学報第六冊（中世庭園文化史） 奈良国立文化財研究所学報第七冊（興福寺食堂発掘調査報告） 奈良国立文化財研究所学報第八冊（文化史論叢2）	浅野 清、鈴木嘉吉 浅野 清、鈴木嘉吉 坪井清足、鈴木嘉吉 森 蘊
昭和三十三年 度	奈良国立文化財研究所学報第九冊（川原寺発掘調査報告）	坪井清足、鈴木嘉吉 小田 剛、守田公夫 小田 隆、杉山二郎 鈴木嘉吉、坪井清足 鈴木嘉吉、田中 稔
昭和三十四年 度 （予定）	奈良国立文化財研究所学報第九冊（川原寺発掘調査報告）	工藤圭章、田中 稔